

右：小村寿太郎 タイトル部分：桂太郎（ともに国立国会図書館蔵）

強の脅威とどのように対するべきかという鋭敏な「危機意識」を常に胸中に抱き持っていた。国際認識に対する判断にピンポイントでも狂いがあれば、自国は存亡の危機に瀕する。「生存リアリズム」ともいべき感覚を、明治指導者の誰もが備えていたのである。

こうした明治のリーダーの国際感覚の象徴こそ、ロシア・バルチック艦隊をことごとく葬り去った奇跡の「元全試合」、日本海海戦を成功させた連合艦隊であり、その連合艦隊の旗幟を担った栄光の戦艦三笠であった。

筆者も青春の時代、日夜を継いで読みふけり、二度、三度と読み返して飽きことのなかった司馬遼太郎氏の小説「坂の上の雲」（文春文庫）にも、日本海海戦における戦艦三笠の勇姿は、精細に描かれている。

明治二十八年（一九〇五）、日清戦争に勝利した日本は、ドイツ、フランス、ロシアによる「三国干渉」を受ける。主役はもちろんロシアで

ある。

「南下政策」を推し進めるロシアは、日本が日清戦争の末に、遼東半島を獲得したことに我慢ならなかった。「ウィットテ伯回想記」（大竹博吉監修、原書房、一九七二年）によれば、ロシアは成長著しい日本より、清国という脆弱な国家を隣国として保つことが国益だと判断したという。「強大ではあるが活動的素質のない支那を隣接国としてゐることが最も利益である」というのが蔵相ウィットテの述べた。

ロシアの烈しい圧力を加えられた日本は、日清戦争で獲得した権益を手放すという屈辱に涙を飲まされたのである。帝国主義時代の国際環境とはかくまで苛酷なものか、と思わずにはいられない。

かくして、列強が繰り広げるパワーゲームに呑み込まれた明治日本は、以降、ロシアを「仮想敵国」として明確に意識し、「一朝事あった場合、戦争に勝利できるだけの軍事力を整えるべく、「戦争外交」を繰り広げていった。

選かに「国際的」だった時代

「明治ほど国際的な時代はなかった」

故江藤淳氏は、山本権兵衛を主人公とした小説「海は甦える」（文春文庫）で、そう言っている。もちろん、逆説的に「翻って現代は、



非常に非国際的な時代なのではないか」という示唆である。これほどまでにグローバルバリエーションが進み、モノもカネもヒトも、技術も情報も国境がないように

往き来する現代よりも、二世紀前の明治時代の方が、日本は遙かに国際的だったと明言しているのである。

特に日清戦争から日露戦争にかけての時期の指導者、たとえば陸奥宗光、桂太郎、小村寿太郎らは、徹底的に伶俐に国際関係を分析し、その認識に基づいて、迫りくる列

渡辺利夫

PROFILE 昭和十四年（一九三九）、山梨県甲府市生まれ。慶應義塾大学卒業。同大学院修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て現職。著書に「新脱亜論」（文春新書）「アジアを救った近代日本史講義」（PHP研究所）など多数。

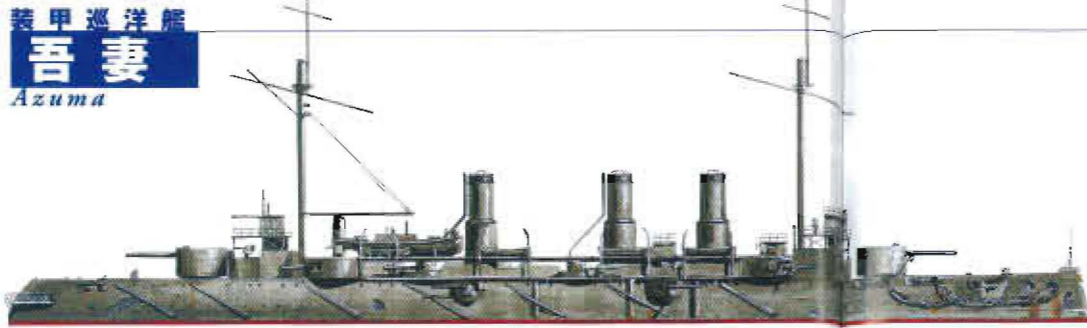
日清戦争勝利後に三国干渉を受けた明治日本は、ロシアを仮想敵国と明確に意識し、海軍力強化を急ぐ。まずはロシアを警戒する

イギリスと結びつきを強め、さらにフランス、ドイツ、アメリカにも艦艇を発注、友好関係を築いてロシアを戦略的に包囲した。

国際情勢を正確に読んだ強かな外交が、やがて日露戦争で実を結ぶ。



生き残るために… 英国と結び、連合艦隊を強化した戦争外交の強かさ



建造：ロワール社(フランス) 竣工：明治33年(1900)7月28日 排水量：9,326t
全長：135.9m 全幅：18.1m 最大速力：20kt 主砲：45口径 20.3cm連装砲4門

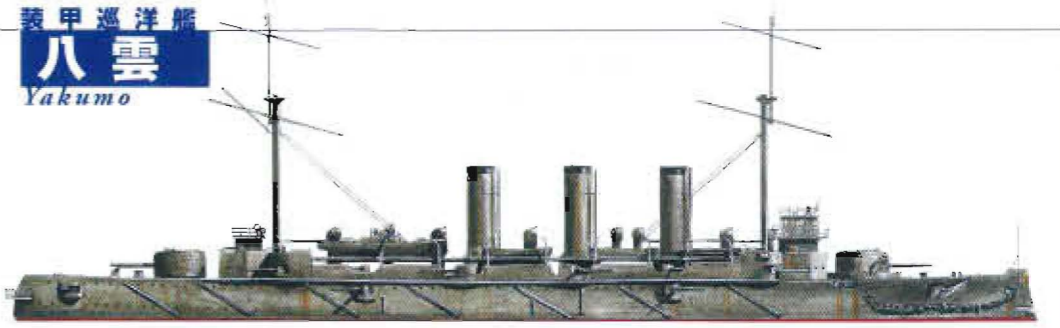
イラスト：吉原幹也

連を自らの支配下に置いたのだから、日本人の憤怒は尋常なものではなかった。そしてイギリスも遼東半島の清国還付の報に驚愕し、種々の抗議を試みた。しかし、ロシアも、ロシアに怯えるのみの清国もこれに取り合おうはずがない。実は同年、イギリスも山東半島北東岸の威海衛を租借し、清国を「蚕食」する勢力に加わった。しかし明治政府はというと、このイギリスの行動に対しては、何らの反対もせず黙認した。ロシアに対する戦備を進めている今、無用なトラブルを起こして、敵を利すのは愚策である。相手が、明治海軍の「六六艦隊」構想の命運を握ってい

水面下で繰り広げた「戦争外交」

るイギリスならばなおさらだ。明治の指導者の冷徹な国際政治判断のリアリズムである。明治三十一年といえ、明治海軍が「六六艦隊」の総仕上げと位置づける戦艦三笠を、イギリスのヴィンカース社に正式発注した年だ。歴史に「if」は禁物だが、日本がイギリスの中国進出に怪訝な顔を見せれば、いかに「共通の敵」を有しようとも、我が国が史実通りに栄光の戦艦を迎え入れることができたとは考えにくいのである。

たして誰が自分の「敵」であり、誰を「味方」とするのか。そのなかでも「最大の味方」とすべきはどの国か。明治日本が徹底的に伶俐な存在であったことは、戦艦三笠の存在がこれを証している。そして日本とイギリスは関係を深め続け、明治三十五年(一九〇二)に日英同盟を結ぶことになる。イギリスは「スプレンドイド・アイソレーション」光榮ある孤立」を貫いてきた国として知られていた。どの国とどの国が同盟を結ぶか、まったく誰も予測できない時代であったが、日英同盟という海洋国家同士の間盟締結は、世界中に衝撃を与える鮮やかな外交的勝利であった。



建造：シュテッティン・フルカン社(ドイツ) 竣工：明治33年(1900)6月20日 排水量：9,695t
全長：124.7m 全幅：19.6m 最大速力：20.5kt 主砲：45口径 20.3cm連装砲4門

「共通の敵」を持つイギリス

詳細は別稿に譲るが、明治日本は海軍力増強のため、明治二十九年(一八九六)より西郷従道・山本権兵衛コンビが発案した戦艦六隻、装甲巡洋艦六隻を中核とする「六六艦隊」構想を大胆に進めた。当時の日本は、自国で大型艦を建造する技術はまだ薄かった。他国への発注を余儀なくされたのだが、日本がもつとも頼りにした国こそイギリスであり、日本は「六六艦隊」のうち多くの艦船の建造をイギリスの造船会社に発注した。戦艦三笠はそのうちの一隻に他ならない。

明治海軍が世界一の海洋国家であったイギリスの「技術力」を信頼してのことであったが、同時に、明治の日本の指導者が、イギリスもまたロシアの南下政策に大いなる危機感を持っていることを見抜き、イギリスとの協調がロシアの行動を制するポイントだと認識したこ

とが大きい。イギリスはロシアと、アフガニスタンやバルカン半島などで対立関係にあった。当時のイギリスはボーア戦争によって、多くの兵士と巨額の戦費を失っていた。この間に軍事力を強大化し、「パクス・ブリタニカ」を脅かす存在に膨れ上がった国こそロシアである。ロシアは特に極東に艦船を集め、東アジアにおける海軍力はイギリスのそれを凌駕していた。世界中でロシアと覇権を争うイギリスにすれば、宿敵が極東で勢力を伸張するのを、指を咥えて眺めているわけにはいかない。「三国干渉」でロシアが日本に遼東半島を還付させるや、イギリスが同半島最西端部の都市である旅順・大連間に艦船を遊弋させたのもそのためである。遼東半島、さらに極東を、ロシアの好きにさせまいとする意志表示に他ならない。

「遼東半島を清国に還すべき」と言いがかりをつけてきた張本人のロシアが、わずか三年後に旅順・大連間を良好にする努力を惜しまなかつたのである。明治三十一年(一八九八)、ロシアは清国に熾烈な圧力をかけ、旅順・大連の租借を取り付ける。彼らにとって旅順・大連は念願の不凍港であり、これをライバル・イギリスの手に渡すなど以ての外だと考えたのだ。

明治日本はイギリスとのつながりの重要性を的確に認識し、二国間の関係を良好にする努力を惜しまなかつたのである。

武士の刀専門店 銀座長州屋



通信販売誌月刊「銀座情報」発行
年間購読料 5000円
購読のお申し込みは下記K係まで。
◎刀のご売却のご相談も承っております。
お気軽にお問い合わせ下さいませ。

☎ 0120-123622
TEL.03-3541-8371(代)

〒104-0061 東京都中央区銀座3-10-4
株式会社 銀座長州屋
http://www.choshuya.co.jp

「両艦の増強は国民の熱狂的支

の姿から、私たちが学ぶべきも

伝達一方のロシアも別のルートから情報を得た。両軍艦は当時、も

戦闘力としても日露海戦において

公文書でたどる日本海海戦と戦艦三笠
「軍艦三笠戦時日記」「第1艦隊戦闘詳報」「日本海海戦電報報告」etc...
日露戦争特別展
国立公文書館 アジア歴史資料センター http://www.jacar.go.jp/



同時に、明治日本がイギリス以外

フランスに装甲巡洋艦吾妻と水雷

の「連立方程式」である。一方のア

同盟国の開戦直前の「プレゼント」

日清戦後の日本は、「眠れる獅子

明治政府の「戦争外交」は、明治